

The Castle of Perseverance を中心とした中世道徳劇における五感と七大罪

和治元 義博

『堅忍の城』（*The Castle of Perseverance*, 1400-1425 年頃）は、後続の道徳劇と比較して際立った構造的特異性を備えている。全 3,649 行という現存する初期道徳劇の中で最長の規模を誇り、アレゴリーとしての七大罪や七美德、神の四人の娘たちのみならず、初期劇には極めて珍しい「死（Mors）」が直接登場する。

本作の最大の演劇史的価値は、写本に付された円形の上演図にある。東を上とする伝統的な「TO 図」とは異なり「南が上」に配されたこの上演図では、周囲に 5 つのやぐら（南：肉体、西：現世、北：悪魔、東：神、北東：食欲）が配置され、中央に「堅忍の城」が位置する。中世キリスト教の伝統において、人間の敵は「肉体」「現世」「悪魔」の三つであり、七大罪はその配下に割り振られるが、本作では「食欲（Covetousness）」に対してわざわざ独立した専用のやぐらが北東に設えられている。McCutchan の指摘通り、劇全体の台詞の 33.8% が「食欲」に関連しているという統計データからも、本作が「食欲」を最大のメイン・テーマとして構造化していることは明白である。主人公「人間（Humanum Genus）」の誕生から死、そして審判に至る一生の各段階において、この罪が魂の救済を揺るがす決定的な要因として機能するのである。上演図における「食欲」のやぐらの位置（北東）は、時計回りに進めば神へ、反時計回りに進めば地獄へと至る「道徳的選択の岐路（境界）」に絶妙に配置されている。

生まれたばかりの「人間」は、善天使と悪天使の論争を経て「現世」の元へ赴き、一度は悪徳に身を委ねる。しかし美德たちの勧告によって改心し、中央の「堅忍の城」へと籠る。城を巡る善悪の両勢力の戦闘において、他の悪徳たちが美德たちに打ち負かされる中、唯一参戦せず、敗北を免れるのが「食欲」である。「食欲」は肉体的に年老いた「人間」に近づき、活力の衰退と将来への不安に付け込んで「年を取って頼れるのは金だけだ」と再び誘惑する。この誘惑の場面では、金貨（千マルク）の授与という「触覚」、富の提示という「視覚」、そして「もっと、もっと」という歌という「聴覚」など、人間の身体的感覚を刺激する演出がなされ、人間は再び罪へと陥る。直後に現れる「死」の一撃によって、人間は富の無力さを悟りながらこれまで頼ってきた「世俗」に裏切られて死を迎える。

本作においては、「人間」の墮落は、神から与えられた「自由意志（Free Will）」と「五感（Five Wits）」を誤用した「人間」の「自己責任」であることが美德たちによって強調される。ここで言及される「五感」とは、単なる肉体的な知覚（Bodily Wits）にとどまらない。同時代の宗教的散文

（*Jacob's Well* や *Lay Folks' Catechism*）および後代の道徳劇 *Mundus et Infans*（1515 年頃）にもあるように、中世における「五感」には、肉体的知覚と「理性、想像、悟性、意志、記憶（思索）」からなる「精神的知覚（Spiritual Wits）」という、重層的な二層構造が存在していた。したがって、『堅忍の城』における墮落とは、肉体的な感覚が世俗の富に惑わされた結果、「理性」や「悟性」といった精神的知覚が曇らされ、正常な善悪の判断力を喪失した状態（機能不全）を指しているのである。

上演図の中央、城の下には「ベッド」の絵が大きく描き込まれており、実際の演出において「人間」が死の直前にここに横たわったことは確実である。これは、当時ヨーロッパで広く普及していた「往生術（*Ars Moriendi*）」、すなわち「いかに良く死ぬか」という死生観の視覚的提示である。1450 年頃の『往生術』の木版画には、死の床の男の周りで魂を奪い合う善悪のサイコマキアが描かれるが、その第 9 図「食欲に対する誘惑」の構図は本作と極めて酷似している。ただし、『往生術』が馬やワインといった世俗物を用いるのに対し、本作では直接的な「金貨」が登場することで、強欲さのリアリズムが強化されている。さらに、瀕死の「人間」が「金を地面の下に隠そう」と言う台詞は、当時の美術における「死の床の食欲（deathbed avarice）」の図像伝統に基づき、ベッドサイドに置かれた「戸棚（cupboard, chest, coffer）」への隠匿を意味していたと考えられる。15 世紀のドイツの細密画や *The Hours of Catherine of Cleves*、あるいは同時代の散文説教集には、死に瀕した男の枕元で誰かがチェストに入っている財産を漁る、あるいは本人が財産にしがみつく様子が頻繁に描かれる。William Tyndeman は善の空間である城の下に悪徳の戸棚がある不自然さを指摘するが、美德を裏切った人間の死の床周辺は、もはや「食欲の戸棚」が置かれるにふさわしい墮落した空間へと変質していると捉えるべきである。

15 世紀の詩 “Of þe seuen Ages” や *Ratis Raving*、チョーサーの *The Reeve’s Prologue* などの記述が示す通り「老人」と「食欲」の結びつきは一般的であったと同時に当時の社会不安の反映でもあった。不確かな神の加護よりも、貨幣経済の浸透によって出現した「目に見える動かせる蓄え（金貨）」に救いを求める心理が、そこにはリアルに投影されている。老年の食欲は自己の老いに対する防衛反応でもあったのだ。

本作を含む道徳劇の特質は、七大罪という抽象的概念を、観客の五感に訴える具体的なドラマへと転換する点にある。劇中では、悪徳たちのきらびやかな衣装（視覚）、飲食の示唆（味覚・嗅覚）、女性による誘惑（触覚）、悪魔が用いる火薬の刺激臭（嗅覚）など、観客の感性を刺激する要素が全編に散りばめられているが、これらの表象は単なる娯楽的演出にとどまらない。登場人物としての「天使」や「悪徳・美德」が、本来は「人間」の内的精神の葛藤を外的に表象したものであると定義するならば、道徳劇とは「人の五感によって人の精神構造を演じる装置」であったと解釈できる。悪徳が五感を介して人間に接近するように、演劇そのものもまた五感を媒介として観客の精神へと介入するのである。観客は、主人公が五感を誤用して墮落していく過程を、自らの五感（劇の視聴）を通じて体験する。この「五感を用いて五感の危うさを学ぶ」というパラドクスこそが、道徳劇の教化機能の核心であった。

中世の人々にとって「罪」は決して一つ一つが個別に存在するものではなく、抽象的な概念でもなかったことは、演劇以外の視覚文化からも窺い知ることができる。例えば、*The Psalter of Robert de Lisle*（14 世紀）に描かれた「悪徳の木」(*Arbor viciorum*)は、罪が単発的に存在するのではなく一つの幹から分かれ、互いに増殖し合う有機的な連関を持っていることを視覚化している。「悪徳の木」をモチーフとした Suffolk 州の St. Ethelbert Church に残る 14 世紀（1377～1399 年）の壁画では、木の幹の一番上に若者の「高慢」を配し、左下には金袋を手にした「食欲」を老婆の姿で描いている。金袋は「食欲」のアトリビュートである。この壁画が示すことは、悪徳が「おどろおどろしい怪物」としてではなく、市井の人間をモデルとした「身近な隣人」として表象されていたという事実である。教会壁画という公共性の高い空間に描かれたこれらの図像は、中世の人々にとって七大罪が日常の延長線上に存在する、極めて具体的な危機であったことを物語っている。

道徳劇の目的は、目に見えない罪や感覚を視覚化することで内面的な魂の戦いを外的なドラマへと変換し、観客の視覚・聴覚に訴えかけて救済への道筋を目に見えるものとして指し示すことによりキリスト教的価値観を観客の中に定着させることであった。『堅忍の城』は、空間概念、貨幣経済、死生観、そして視覚文化と深く共鳴しながら観客の感覚に介入し、内面的な魂の戦いを外的なドラマへと変換して救済への道筋を指し示し、五感が墮落の契機であると同時に救済の不可欠な媒介であるという逆説を体現した壮大なドラマであることを今回の発表で示した。

【参考文献】

Primary Texts

The Castle of Perseverance, in *The Macro Plays*, ed. Mark Eccles. London: Oxford University Press, 1969.

Jacob’s Well, ed. A. Brandeis. London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., Ltd., 1900.

The Lay Folks’ Catechism, eds. T. F. Simmons and H. E. Nolloth. London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., Ltd., 1901

The Psalter of Robert de Lisle in the British Library. ed. Lucy Freeman Sandler. Oxford University Press, 1983.

Ratis Raving, and Other Moral and Religious Pieces, in Prose and Verse, ed. J. Rawson Lumby. New York: Greenwood Press, Publishers, [1870] 1969.

Secondary Texts

McCutchan, J. Wilson, “Covetousness in *The Castle of Perseverance*” *University of Virginia Studies*, 4 (1951) 175-191.

Tydemans, William. *English Medieval Theatre, 1400-1500*. London: Routledge & Kegan Paul, 1986.